

英国の独立学校について考える
— グローバルに進行するプライベート化？ —
指定討論

宮島 健次
(西武文理大学)

はじめに

筆者は、かつて英国のパブリックスクール、特に19世紀中頃にトマス・アーノルドがもたらしたパブリックスクールの教育システムの劇的な変容について興味があり、調べていたことがあった。その後、英国教育への興味は現代の大学進学システム、GCE Aレベルに移っていった。恥ずかしながら、どちらも大した業績を出せていないのであるが、パブリックスクールのことを調べていたということが縁で、本学会が出版した『英国の教育』では、力不足ながら「独立学校」の章を担当させていただいた。またさらにこの執筆がきっかけとなり、今回のシンポジウムの企画者である石黒万里子会員から、指定討論者という、これまた大きな役目を打診された。なにやらわらしべ長者のようであるが、せっかくの機会である。普段考えていることをシンポジストにぶつけてみよう、と思い引き受けることにした。

今回のシンポジウムは以下の4つの視点が設定されていた。1 保護者の教育期待（独立学校は階級再生産／上昇戦略／階級閉鎖戦略のための装置か？）、2 教育の市場化（英国の独立学校システムの輸出は、グローバルな市場拡大という意味を持つか？）、3 学力観（グローバルな学力観は独立学校における教育内容に影響を与えているか？）、4 公私関係の変容（独立学校の存在と公営学校の改革の関係は？）の4点である。この視点に準じて、日本の私立学校の現状を意識しながら、各登壇者に論点を示し、議論を求めた。以下、まとめていく。

1. 保護者の教育期待の視点から～プレップスクールやパブリックスクール（以下、伝統的高級独立学校）と地域コミュニティとの包括的關係について

日本の私立学校が抱える問題点の一つに、選抜による社会的同質性および地域コミュニティとの關係の希薄化、あるいは分断が挙げられよう。たとえば、東京近郊に住み、都内の私立学校に通う子どもの友人關係は、「近所に住む」同じ年齢の人たちが主ではなく、「遠くに散らばって住んでいる」が「よく似た」人たちが主となっている。そのため都内で働く親も含めさまざまな社会的格差が「見えなく」なっている。

果たして、現代のイギリスの伝統的高級独立学校に子弟を通わせる保護者相互の關係、そのような保護者と地域との關係は一体、どのようなものなのであろうか。もし日本と同じような状況

であれば、そのような伝統的高級独立学校に通う子どもは、まわりはすべて自分と似た人たちだから、たとえば「子どもの貧困」やさまざまな「社会的格差」が見えなくなっているのではないか。それが階級の固定化の一因と言えまいか。

逆にそのような伝統的高級独立学校に通う子どもたち、あるいは保護者を地域社会はどのような「まなざし」で見ているのであろうか。エリートとして見るとしたら、それは尊敬なのか、羨望なのだろうか。

2. 教育の市場化、学力観（教育格差）の視点から ～教育の「サービス」化への対応について

20世紀末、大量生産・大量消費社会の到来とともに、教育はすっかり「サービス」に変容した。これはたとえば教師－生徒関係や教育内容が「贈与」型から「等価交換」型に変わったということであり、「将来役に立つ」科目の履修が重視されるようになる、ということでもある。我が国でも古典、特に漢文学習不要論ともいうべき主張が大手を振って論じられている。そうなる古典語教育を伝統としてきた伝統的高級独立学校の、その科目の取り扱いに疑問が生じる。聞くところによれば、GCSEやGCE Aレベルで、伝統的高級独立学校以外の学校が価値を見出さない科目、古典語などをあえて学び、受験することで高得点を狙うという戦略もあるらしい。

さらにわが国では、情報過多社会の影響か、はたまたコロナ禍でのオンライン授業の影響からか、昨今ではタイパ（タイムパフォーマンスの略、時間対効果）などといわれてしまうような学習観が出来上がってしまっているように思えるのだが、このあたりのイギリスの状況はどうなのだろうか。

3. 公私関係の変容の視点から ～公営学校のアカデミー化と我が国の教育改革について

公営学校がアカデミー化することで、スポンサーがつき財政的な余裕が生まれ、教育資源が豊かになり、その結果、生徒の学業成績も向上するという。この見地からすると、我が国で進行している教育改革はどのように評価されるのであろうか。

一般的に我が国の私立学校の社会的地位・評判は、地方では低く、公立学校に進学できない学生の受け皿的存在である。しかし都市部では、「公立の地盤沈下」と言われるほど、その評判・地位は逆転している。「お受験」などに象徴されるように、優秀かつ経済的余裕のある層はこぞって私立学校に進学し、そうでない層が公立学校に進学する、という図式ができて久しい。その影響を受けた学校改革は、私立学校を成功モデルとしてお手本にしてきた。それがたとえば学校選択制だったり、中高一貫教育だったりするわけである。いわば「公立の私立化」である。

他方で、その逆の「私立の公立化」ともいえる現象が高等学校等修学支援金制度（高校無償化政策）によって顕在している。これまで私立は「見えない」経済的障壁で、一定以下の層を排除してきた。しかし、高校無償化政策によって、これまで排除されていた層がこぞって私立に入学できる環境ができあがってしまったのである。SNSなどでは、少子化と多様な入試制度の恩恵で、

面接試験のみで進学できてしまうような中程度以下の偏差値の私立高校などで起きている混乱事例が多く報告されている。そこでは、階層文化の衝突から、想定外のさまざまなトラブル（公立の教育困難校が抱えていた問題）が起きているという。これらが社会問題として表面化するのには時間の問題だろう。

こうなると従来の私立学校を支えてきた層——高い教育費をかけてでも我が子にはいい教育環境を用意したいと思っている保護者たち——はどこを目指すのだろうか。彼らのニーズは自分たちの子どもに良質な教育環境を用意することであるから、将来の海外留学などを想定し、幼少期から在日のインターナショナルスクールやアメリカンスクールなど、オールイングリッシュで運営される学校をその選択肢の一つにすることは想像に難くない。

シンポジウム当日では、松原氏は、近年よく見られるパブリックスクールの日本への輸出は中国の富裕層をターゲットにしていると指摘した。確かに今はそうであろう。しかし、現状から考えれば、近い将来、我が国の富裕層あるいは準富裕層と呼ばれる人たちも、日本に進出してきている英国のパブリックスクールをめざすのではないか。日本に住みながら、英国とほぼ同じレベルの教育を受けることができる。これほどの特権意識はあるまい。このことが英国のパブリックスクールが輸出される意味のひとつとしてとらえられるのではないだろうか。

4. 全体に対して～ノブレスオブリージュという視点から

さて、先に地域社会は、伝統的高級独立学校に通う生徒たちに対しエリートとしての「まなざし」を持つのかどうかを問題とした。かつては伝統的高級独立学校に対する社会的期待は相当高く、また当の本人たちもその自覚を持ち合わせていた。果たして、現代の伝統的高級独立学校では直接的、間接的にノブレスオブリージュ（高貴な責務）に触れる機会はあるのであろうか。また、同時に英国の公営学校のトップ校ではどうなのだろうか。

翻って我が国のエリート教育を見ると、残念ながら学校教育を通じたノブレスオブリージュの醸成は難しいと言わざるを得ない。なぜなら、教育の機会均等を理念とする我が国の教育制度においては、家庭の経済的背景に問題がなく、学業成績がよければ、誰もがエリートになれる可能性があるからである。実際、図1のように、三谷はるよ氏（龍谷大学）は、我が国のエリートが

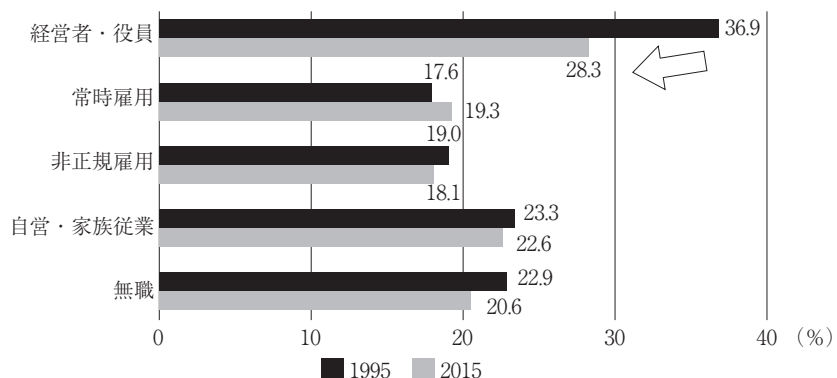


図1 収入別ボランティア活動の参加率

出所：〈<https://gendai.media/articles/-/70652?page=2>〉より

社会貢献（ボランティア活動）から撤退していることを指摘している。

このような日本のエリートたちの特質は、その頂点に君臨する東京大学の入学式で、祝辞として述べられた上野千鶴子氏のことばに現れている。

あなたたちはがんばれば報われる、と思ってここまで来たはずです。ですが、冒頭で不正入試に触れたとおり、がんばってもそれが公正に報われない社会があなたたちを待っています。そしてがんばったら報われるとあなたがたが思えることそのものが、あなたがたの努力の成果ではなく、環境のおかげだったこと忘れないようにしてください。あなたたちが今日「がんばったら報われる」と思えるのは、これまであなたたちの周囲の環境が、あなたたちを励まし、背を押し、手を持ってひきあげ、やりとげたことを評価してほめてくれたからこそです。世の中には、がんばっても報われないひと、がんばろうにもがんばれないひと、がんばりすぎて心と体をこわしたひと…たちがいます。がんばる前から、「しょせんおまえなんか」「どうせわたしなんて」とがんばる意欲をくじかれるひとたちもいます。

あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください¹。（下線：筆者）

我が国のエリートは、ともすれば自らの業績を「独力」で成し遂げたと思いこんでしまい、傲慢にふるまうことがある。筆者はこの上野氏の祝辞を、エリートの傲慢さを諫め、ノブレスオブリージュを自覚させるためのことばとして受け止めたが、そもそもこのことばが話題になるということは、それだけエリートたちあるいはその候補生たちがノブレスオブリージュに無自覚であるということの裏返しであろう。

おわりに

今回のシンポジウムでは、英国の独立学校、特に伝統的高級独立学校と我が国の私立学校との比較を念頭に置き、上記のような論点を提示した。シンポジウムがプレップスクールからパブリックスクールおよびインディペンデントスクール、加えて公営学校とアカデミーと多種多様な学校段階、学校種を議論の対象としてしまったため、正直なところ、筆者が示した論点が議論の潤滑油になったとは言い難い。しかし、この間口の広さが、逆にこのシンポジウムの面白さでもあったかと思う。

1 2019（平成31）年4月12日に行われた東京大学学部入学式にて来賓として登壇した上野千鶴子の祝辞。〈https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html〉より。